

平成19年2月学術講習会

(社)日本鍼灸師会
(社)東京都鍼灸師会

主催

厚生労働省後援 通算 662 回
(2007.2.25)

演題および講師

プライマリ・ケア疾患編

「季節性アレルギー性鼻炎」

- 花粉症の予防法と対策 -

日本医科大学耳鼻咽喉科学 助教授 大久保 公裕

鍼灸治療編

「リウマチ・膠原病の鍼灸治療」

シェーグレン症候群患者の症状改善効果を中心に

埼玉医科大学東洋医学科 医学博士 小俣 浩

「季節性アレルギー性鼻炎」

花粉症の予防法と対策

大久保 公裕

花粉症をはじめとするアレルギー性鼻炎はI型アレルギーの典型的な疾患であり、生活習慣病としての慢性疾患でもある。治癒が難しいかわりに、重症化してもQOLの低下を生じるのみである。IgEを介して肥満細胞が反応する典型的なI型アレルギー疾患であるため特に即時相では肥満細胞からのメディエーターにより症状が決められる。その病型はくしゃみ・鼻汁型、鼻閉型、充全型(くしゃみ、鼻汁、鼻閉がすべてあるもの)に分けられる。くしゃみはヒスタミンの三叉神経終末刺激で生じ、上行性に中枢までいく

間に軸索反射により副交感神経刺激を介して鼻汁分泌を亢進させる。鼻閉は主としてロイコトリエン、トロンボキサンA₂などの脂質メディエーターが鼻粘膜血管のそれぞれの受容体に作用し、粘膜の腫脹を生じさせる。現在改訂第5版の鼻アレルギー診療ガイドラインでも病型と重症度の組み合わせによって治療方針を分けている。このガイドラインの特徴はEBMに偏らず、実地医療を優先していることであり、WHOワークショップレポートARIAと大きく異なる。実際の日本での花粉症を含むアレルギー性鼻炎治療では第2世代抗ヒスタミン薬が非常に多く使用されているが、ガイドラインと全く異なった治療法の選択ではない。第2世代抗ヒスタミン薬は鼻閉にはその効果が若干弱いものの全体的に症状が緩和され、副作用も少ないので使用しやすく、QOLも良好にコントロールする。

花粉症に対する免疫療法は治癒を考える上で重要である。新しい形も考えられており、舌下免疫療法と抗体療法は既に治療が始められている国がある。舌下免疫療法のメカニズムは完全に解明されていないが、効果を認める論文も多く、我々の施設でもスギ花粉症への効果を確認している。抗IgE抗体療法は単独でスギ花粉症に対する臨床試験が行われ、強い効果が示された。組み換え主要アレルゲン免疫療法、ペプチド免疫療法では国際的に見ても日本が進んでいるが、CpG結合アレルゲン免疫療法も研究が進んでいる。この3者はまだ日本でのRCTによる治療研究は行われていない。

アレルギー性鼻炎を含むアレルギー疾患の治療の目的をアレルギーの症状改善ではなく、治癒におけば免疫療法が重要であることがわかる。幸いこれらの新しい免疫療法では従来のような重大な副作用も報告されていない。また臨床研究に入った免疫療法では、はっきりとプラセボとの効果の差を出している。このように今後、よい副作用が少なく、有効性の高い免疫療法を開発していくことが免疫療法を実際の臨床の場に普及させる必要条件と考える。



日本医科大学耳鼻咽喉科学 助教授 大久保 公裕

「リウマチ・膠原病の鍼灸治療」

シェーグレン症候群患者の症状改善効果を中心に

小俣 浩

はじめに

シェーグレン症候群 (Sjogren's syndrome : 以下 SjS) は、外分泌腺の慢性炎症と自己免疫疾患・結合組織疾患の合併症と報告され、関節リウマチ等の膠原病と合併することが多い疾患である。本邦における推定患者数は約 10 万人で特に 40 歳、50 歳代以降の中高年女性に多く発症する。臨床症状は、リンパ球浸潤により導管や腺房組織が破壊され眼球・口腔の乾燥症状 (dry eye・dry mouth) を訴えるだけでなく、気道粘膜や消化管・膣・汗腺等の他の外分泌腺にも影響し患者の QOL は著しく障害される。

乾燥症状に対する鍼治療の実際

近年、低周波鍼通電療法 (Acupuncture Electrical Treatment : AET) は、その刺激強度や刺激頻度により有効性の高い治療方法が検討されている。我々は、SjS 患者群の乾燥症状に対する顔面部 AET の効果を観察し、さらに AET による累積効果についても併せて検討した。鍼治療の方法は、顔面部の翳風穴 (手の少陽三焦経) と下関穴 (足の陽明胃経) を結び、左右側それぞれに周波数 1Hz と高頻度刺激である 30Hz AET も 10 分間行った。その結果、特に顔面部 30Hz 群で唾液・涙液分泌量の増加が認められた。そこで、30Hz AET 10 分間・10 回の累積効果を観察したところ、ドライマウス・スコアの初回と 10 回目施行後の比較で得点が低下し、日常生活における口腔乾燥症状の改善が認められた。

諸外国における研究報告

本研究領域は、1992 年以来 Sweden の Karolinska 研究所、T.Lundeberg 教授グループが圧倒的な研究成果を有し、その後米国・英国・オーストリア等での研究が盛んである。最近では、癌放射線療法後の口腔乾燥に対する鍼治療効果が多

く報告されている。また、Dry eye 研究で御著名な慶応義塾大学眼科坪田教授と共同研究で Nepp. J が涙液分泌機能の鍼治療効果を報告している。

. 今後の展望

今回演者は、SjS 患者の Dry eye と Dry mouth に焦点を併せた鍼治療研究結果を報告するが、今後は頭頸部腫瘍（癌）の放射線療法後の口腔乾燥や、VDT 症候群患者の眼球乾燥等の鍼治療効果も検討し、鍼治療の適応疾患の拡大を図り、多くの国民の健康保持増進に寄与したいと思う次第である。



埼玉医科大学東洋医学科 医学博士 小俣 浩